

新春対談

〜智頭林業の今とこれから〜

近年、森林に関係した法制度の整備や技術の進歩が急速に進んでいます。それによって、「智頭の山をどうするのか」「次の世代、その次の世代に何を残し何を伝えていくのか」を考える時が来ています。

今回は、金児町長と大谷森林組合長に智頭林業の現状や課題、今後の展望について語っていただきました。



司会 (山本山村再生課長)

それではまず最初に、智頭林業と他の地域の林業との違いをお聞きします。

町長 智頭は「杉のまち」、智頭の杉はきれいな赤身で、大径木。杉の赤身は腐らないと言われていて、径が大きいものは、古来から造作材として使われてきた。そうした長所に付加価値をつけて堂々と「智頭杉」として売って行けると思う。

組合長 智頭林業の特徴は、長い歴史に培われてきたところにある。歴史があつての長伐期、大径木であり、今後そのブランドを維持していくためには、智頭林業を守り、地域の資源として次に伝えていく必要があると思う。

司会 木材価格は安く、林業の担い手も少ないという厳しい現状の中で、一番の課題は何だと思えますか。

組合長 やはり将来への方向性や希望が見えないのが一番ではないか。木材価格が下がり林業が衰退してきているため、若者が参入しづらい状況だが、歴史ある林業地の小さな町だからこ

そ、この状況を町と連携して打破していかないといけない。

町長 年間生長量ぐらゐの材積を伐りたい思いがあるが、伐れない。山を維持するための伐採と更新の計画づくりが課題。伐った材をお金にすることが一番大事なことで、良材は造作材に、その他の材は鉛筆やストロークに加工するなど、価格が安くてもお金にしていかなければならない。

司会 今後、若者を巻き込んでいくことも課題の一つですが、町内には森ノ学ビ舎などの林業家の若手グループもあります。そういった動きへの評価、期待などをお伺いできますか。

町長 智頭に移住して林業に携わりたいと思っている若者が少なからずいる。そういった子たちがいて、森ノ学ビ舎があつて、森ノ学ビ舎の中から林業に就業する人がいて本当に良いことだと思う。若者が地域で生活することは地域のプラスになり、彼らには林業だけではなく、地域の若手グループのリーダーになって欲しい。

組合長 私が組合長になってか

ら、若手グループと組合職員や関連業者との意見交換会等交流を始めた。今後その交流が林業、智頭を守っていくためにどうしたらいいのか、知恵を出していく動きになればと思う。

司会 最後に今後に向けた「夢」をお願いします。

町長 みんなに満足してもらえらる「住民満足度の高い町」というのを第一義に考えている。就職や進学を県外に求め、子どもがなくなっていくことは仕方がないことなのかもしれない。ただ、子どもたちには、家族や地域の人に「智頭に生まれて良かった。智頭で育って良かった。」と言って欲しい。そういう子どもを育てたいし、育つ町であって欲しい。

組合長 自伐林家や森ノ学ビ舎など、森林組合を通じた地域の若い林業従事者の居場所作りの支援を行いたい。また、智頭杉のブランドを守り、材に付加価値を付けて売り出し、さすが杉の町だと言われるような地域づくりを町とともに進めていきたい。